

## あとがき

今回のクリスト展は“Wrapped Reichstag: Project for Berlin”展で、クリストが1972年以来、執拗に取り組んでいる旧ドイツ帝国国会議事堂の梱包、すなわちベルリンのプロジェクトに関するドローイング、コラージュ等21点の展示である。当画廊では1982年4月および1984年4月にクリスト展を開催しているので今回は第3回目である。

この展覧会のためにカタログを作成したが、このカタログの一つのポイントはクリストに対する柳正彦さんのインタビュー記事である。これは1986年7月5日にクリストのスタジオで行われたものであるが、ラップド・ライヒスタークの仕事を中心に、われわれの知らなかった新事実とともにクリストの考え方が明快に述べられている。またラップド・ライヒスタークに関する年譜(1971~86)を掲載したが、これはこのプロジェクトがその発生から現実のものになるとうとする15年間の過程を示すもので貴重である。このインタビュー、年譜は柳正彦、ハリエツト・アーギャングのお二人の労作でクリスト研究のために欠かせない資料となった。この翻訳についてはドイツ事情にくわしい中島芳郎さんをお願いした。以上3氏のご協力に厚くお礼申し上げます。

なおこの展覧会のためにポスターを作成したことを付け加えておきたい。

クリストについて私はいろいろ感ずるところが多いが、最近特に思うことについて若干申し述べたい。第一はクリストはわれわれに力を与える、ということである。一見不可能と思われるプロジェクトを現実のものとする、これはロマンである。空想することは容易である。しかしそれを現実のものにしようとすると話は別である。もし実現しようとするとそこに巨大なエネルギーが生ずる。それが人の心を動

かす。それは感動と言ってもよい。私はすぐれた芸術の要件のひとつはわれわれに力を与え、感動を与えるものだ、と思っている。クリストは正しくそれに該当する。

第二にクリストのドローイングの抜群のうまさを挙げる。彼のメリハリのきいた切味のいいドローイングは素晴らしい。もし彼の優れたドローイングがなかったとしたらクリストの仕事はもっともっと小さなものになったであろう、彼のドローイング、コラージュは単なるプロジェクトの設計図ではない。これは独立してそれ自体で存在する優れた絵画である。

第三にクリストの仕事は夫人のジャンヌ・クロードの協力なしには存在し得ないということである。クリストの仕事はプロジェクトの計画とその実現とその間のプロセスから成り立っているが、これは一つの事業である。この事業計画達成のためには背後に強力な資金・管理体制が必要である。それをジャンヌ・クロードが担っている。クリストとジャンヌ・クロードは表裏一体である。驚くべきことにこの2人はともに1935年6月13日生れという神秘的、魔術的な結合なのである。将来、クリストの仕事を讃えてメダルが作成されるとしたら、その表面はクリストの肖像がきざまれているが、その裏面を引っくり返すと、そこにはジャンヌ・クロードの肖像が浮び上ってくるだろう。

私は、クリストのラップド・ライヒスタークのプロジェクトの実現を心から祈っている。これが実現されると芸術的意味もさることながらその政治的意味は甚大である。西独、英、米、佛、ソ、東独の合意なしには実現されないプロジェクトだけに、その実現は東西緊張緩和のひとつのメルクマールとなるであろう。

ラップド・ポンスフが当画廊の展覧会后数ヵ月で許可され、それから1年後現実のものとなったように、ラップド・ライヒスタークも当画廊の展覧会を機に少なくとも1年半後には実現されるであろうことを期待を込めて祈念するものである。

この展覧会のためにクリスト夫妻は来日の予定である。その際、現在計画中の日本とアメリカ西海岸で同時に実現予定の“アンブレラ”のプロジェクト

(直径8 m、高さ6 mのアンブレラ3000本を設置する——日本はブルー、米国はイエロー——)の候補地探しが予定されている。これは第2回目で、すでにこの4月にはクリスト夫妻はマイクロバスで3,700 kmを走破、候補地の探査中である。

最後にクリスト夫妻の日本滞在が実り多いものであることを希うとともにますますの御健勝を祈るものである。

1986年9月13日

佐谷画廊 佐谷和彦